「勉強」概念の教育学的再考
－篠原助市と佐藤三郎の所論から－

助　川　晃　洋

Ⅰ　研究の経緯とねらい

本学大学院人文科学研究科教育学専攻修士課程において中国人留学生の陸希（2019年４月入学、2021年３月修了）は、次のような研究に取り組んでいる[1]。

中学生の勉強法の変遷に関する一考察[2]
－家庭学習の他律化に焦点を当てて－

日本では、「教育ママ」という言葉が登場した1960年前後から、家庭教育は、家族が独自に行う教育とは違い、学校教育の下請け的な性格を持つものとみなされるようになった。また2000年のPISA調査開始以降、子どもの学力低下が社会問題となり、学校が出す宿題の頻度と量が増加するなど、家庭学習の充実がめざされた。こうした位置づけと方針は、現在に引き継がれている。

しかし家庭での子どもの勉強に関する先行研究は、突出したエピソードを紹介することや、マクロな統計データを列挙することにとどまっていて、リアリティに迫ることができていない。そこで修士論文において私は、中学生の勉強の有り様を経年的にとらえることにチャレンジしたい。中学生だけを取り上げるのは、彼／彼女らこそが、高校受験・入試という全員参加の学歴獲得競争の渦中にあって、勉強から逃げることができない（少なくとも小学生や高校生よりは、ずっとできにくい）状況に置かれていることによる。そして具体的な研究課題としては、次の三つの問いを想定しているが、扱

う時代と、その都度の象徴的な方法は、それぞれで異なっている。

1．1970年代から1990年代にかけて、教科書に加えて、市販の参考書や問題集を活用した定期（中間・期末）テスト対策が、どのように行われていたのか。

2．1990年代以後、特にゼロ年代頃から、学習塾（補習塾や進学塾など）への通塾率が高まるにつれて、どのような影響が見られるようになったのか。

3．最近になって、陸続と刊行されている勉強マニュアル本（現役東大生が書いた指南書など）が、特に効率性の観点から、どういったやり方を薦めているのか。

これらに対して順次回答していくならば、その結果、過去約50年間にわたる関係の動向について、一つの歴史的な説明を提示することができるはずである。

新井郁男編著『学校と塾や地域との間　子どもはどこで学ぶか』ぎょうせい、1990年

清水章弘『中学生からの勉強のやり方（新学習指導要領対応・改訂版）』ディスカヴァー・トゥエンティワン、2019年

中内敏夫『中内敏夫著作集Ⅷ　家族の人づくり　18～20世紀日本』藤原書店、2001年

藤澤伸介『ごまかし勉強（上・学力低下を助長するシステム、下・ほんものの学力を求めて）』新曜社、2002年

溝脇克弥「学習塾研究の課題と展望－学習塾の普及は学校教育に何をもたらしたか－」『教育論叢』第62号、名古屋大学大学院教育発達科学研究科教育科学専攻、2019年3月、pp.67-74.

本稿は、指導教員の立場で上記の取り組みをサポートすべく、様々な情報提供を繰り返すうちに、いわば派生的にできあがったノートのようなものであり、勉強に関する篠原助市（1876-1957）と佐藤三郎（1921-2002）の見解の概要を把握すること（それ

ぞれⅡとⅢにおいて）を意図している。篠原は、吉田熊次や長田新、森昭らと並んで、戦前・戦後の「日本教育学」[3]を代表する大人物であり[4]、佐藤は、アメリカ教育学、何よりブルーナー（Jerome Seymour Bruner）に関する一連の業績で[5]、その名が知られている[6]。

Ⅱ　篠原助市の場合

明治期以降の我が国の講壇教育学は、欧米の教育思潮を積極的に受容・摂取し、それに依存して、形成・展開されてきた。大正期の篠原であれば、新カント派のナトルプ（Paul Natorp）の社会的教育学に依拠して、理論構築を推し進めている（『批判的教育学の問題』1922年）。しかし昭和期に入り、『理論的教育学』（1929年）と『教育の本質と教育学』（1930年）を刊行し、「理論的教育学」を体系化した後、篠原は、教育思想史上の研鑽を積み（『シュライエルマッヘル』1939年）、同時代のドイツ教育学に関する知見を深めるとともに、国内の教育政策・実践にも関心を寄せていく（『教育断想』1938年、『教育学』1939年）。東京文理科大学を定年退官した翌年の1942年に上梓した『教授原論』では、ついに、いや彼といえども結局は（当時の他のほとんどの教育学者と同様に）、歴史的・民族的教育学に行き着き（『民主主義と教育の精神』1947年、『新教育学概論』1948年）[7]、そこからナトルプの教育方法論における論理主義や客観主義、対象主義を批判しつつ、国民学校への制度改革と関連させながら、学校教育、とりわけ教授の目的、内容、方法を論じており、その過程で、第12章「学習と学習態度」の第２節「学習態度」において、「学習意志」、「興味」、「注意」に引き続き、「勉強」と題した項を設けている。

そこでまず篠原は、「点滴石を穿つ」という諺を引き合いに出して、次のように述べている。

> 学習態度は勉強の習慣に於て始めて完きものとなる。日常の用語でも勉強しないことと学習しないこととは略ぼ同義であり、勉強しなければ成績は上らないといふことは常識となつてゐる。成績の上ると否とは多分に素質によるであらうが、

素質が才能となるには一に勉強に俟たねばならぬし、よし素質に恵まれなくとも勉励倦まないものは素質を有しながらも怠惰なものに勝る萬々である[8]。

次に篠原は、勉強の定義とメルクマールについて、次のように述べている[9]。

勉強とは一度着手した仕事を、内外の障害に拘らず、あくまで完成しようとする道徳的資質である。

と定義しておかう。そしてこの定義からして、我々は直ちに、勉強の本質的徴表として、第一に、仕事其の者を愛し、喜んで之に従事すること、第二に、意志の絶えざる緊張であること、第三に、目的を達するまで、即ち仕事の完成するまで、如何なる障害をも排しつゝ進む固執的な態度であること、第四に、道徳的な一つの習慣であること等を挙げ得る。

そして篠原は、勉強が成立し、継続するための条件として、次の六つを挙げている（番号は引用者が付した）[10]。

①「適当な課題」:「各種の課題が児童の能力に適合することは勉強の第一の条件であり、過重の要求は却つて彼等の意気を沮喪せしめ、勉学の芽をたち切ることとなる」。

②「適度のしかも適切な助言」:「勉学の行く手を照し、其の進路を容易ならしむるやうな、適当な、しかも過度でない助言を与ふることが必要である」。

③「課題の徐々の向上」:「徐々に課題の程度を高め、児童をして意力に鞭ち自ら険坂を上らしめねばならぬ」。

④「課題の完成に対する厳格な要求」:「一度適当と認めた問題を課した以上、要求の満足せらるゝまで遂行せしめ、苟くも仮借してはならぬ」。

⑤「社会的な影響と刺激」:「同僚の勉強、年長者の孜々倦まない態度、わけても教師の知的な愛と努力は自然に怠りがちな児童を引き立てると共に、学友相互の切磋琢磨により勉強の習慣は次第に育成せられ」る。

⑥「成果の適正な評価」:「勉強の成果を適当に評価すること、言ひかへれば成果が勉学の賜であるか、或は単に勝れた

能力に基くかによつて、適当な評価を与へ、之によつて内的な満足を感ぜしむることが必要である」。

篠原によれば、勉強は、学習者自身が率先して取り組むものであるが、始めた以上は緊張を保ち、対象に向き合い続け、最後までやり抜かなければならない。そして教師からのはたらきかけによって、子どもは勉強への意欲を喚起され、その習慣は、子どもたち同士が切磋琢磨することで形成される。ただし互いに刺激し合うことは結構であるが、競争に支配されることは好ましくない。

同僚よりも良好な成績を収めようとの競争心を刺激し、勉強へ一層の拍車を加へる。世には競争をば不純の動機として一概に排斥しようとするものも少くないが、夫れが学級生活に於ける自然の現象であるからには、強ひて阻止するに及ばないし、又阻止し得べくもない。多かれ少かれ競争のない社会なるものは大凡存在しないであらう。過度の競争には固より危険が伴ふが、この危険を緩和し有効に利用するは一に教師の技量如何にかゝる[11]。

また教師は、子どもの勉強に際して、その都度のレベルに適合した課題を提示し、適切なアドバイスを怠らず、結果を適正に評価するべきである。

このような1942年時点での勉強に関する篠原の論述は、1953年に出された『教授原論』の改訂版でも、一字一句違っていない[12]。しかしそれが、その時々で、どのように受けとめられたのかについては、全く不明である。

Ⅲ　佐藤三郎の場合

雑誌『児童心理』1975年９月号では、「勉強ぎらいから勉強好きへ」という特集が組まれ、評論家や現場教師、自治体の教育委員会室長、教育研究所員らに加えて、大学教授を中心に、当代屈指の教育研究者が寄稿している（全21編中13編が該当、うち５編を選出、収録順に下掲、所属・専門分野加筆、副題・頁番号省略）。

新堀通也（広島大学・教育社会学）「『勉強』とは何か」

重松鷹泰（名古屋大学・教育方法学）「勉強ぎらいの子をつく

るもの」

砂沢喜代次（北海道大学・同上）「勉強ぎらいの子の集団指導」

杉原一昭（横浜国立大学・教育心理学）「教科の好き・きらいのある子」

石川松太郎（和洋女子大学・日本教育史）「『勉強』の教育史的考察」

佐藤（大阪市立大学・教育方法学）の「勉強の教育学」もまた、これらの仲間の一つに数えられる。そこで佐藤は、次のように述べている[13]。

> 去年完結したばかりの５巻本の『教育経営事典』（帝国地方行政学会）の索引にも「勉強」の項は見出されないし、またつい最近出版され、「勉強」と深く関係しているはずの授業研究の事典（『授業研究大事典』明治図書）にも「勉強」の項目は収録されていない。
>
> 教育学上の用語としては、かなり早くから使われていないので、当然ともいってよい。教育学だけではない。現行の学習指導要領のどこにも「勉強」の言葉は出ていない。
>
> だが、教育学上の、また教育行政サイドからの、公式的、形式的用語としての「勉強」という言葉の使用はないが、「勉強」という言葉は実際に必要であり、また一般には、「学習」という言葉に代えられているが、「学習」ではカバーできない勉強の事実は依然として残っているのであって、教育学的にも重要な意味を持っていることを忘れてはならない。
>
> 戦後において、それまで極めて当然とされていた学校教育用語の「教授」が禁句となり、代わって「学習指導」が登場してきた。「教授」は、教える側の権威とそれに裏付けられた授業の厳しさを語感としてもっていた。「学習」はもともと心理学用語であって、人間でなくても、有機体（ネズミでもネコでもハトでもサルでもよい）であれば、刺激と反応の神経メカニズムによって、新しい反応（行動様式）を容易に習得する。特に労することなく、自然に、自発的に学習し得るのである。もちろん、教師は学習を指導しなければならな

いが、厳しく指導するのでなく、側面から優しく指導して、学習者の自主性を育てねばならないというのである。

この傾向に伴って、「勉強」も禁句となりかかったのである。確かに「勉強」という用語は固い印象を与える。

（中略）

「学習指導」の語の与える優しさの語感から、しばしば教える側の権威まで放棄する誤りが出てきた。きらいな勉強は、骨折ってまでする必要はないという放任主義も見られるようになった。

（昭和－引用者注）33年に系統的教授面に力点をおいた学習指導要領の改定があり、それとほぼ前後して社会主義の教授理論が紹介されると共に[14]、教授の復権の兆候が現われてきた。教授学とか、教授＝学習過程の研究とかいわれ出されることによって、学習指導にしても、厳しく指導する面に再び日の目があたるようになってきたのである。

そして佐藤は、「私の立場は、教授の復権という点では変りはない」としつつも、「あくまで学習者が、必要不可欠な教育内容を自らの努力によって習得しうる学習能力の基礎を厳しく鍛える面を強調したい」として、次のように続けている。

「人間の子どもであれば、だれしも自己の知的成長に喜びを感じないはずはない。学校における教科の学習は、子どもに対して学習に関する“興奮の感覚”（ブルーナー）を与えるものでなければならない。もちろん、知的学習は決して、座して楽しむような安易なものではないが、努力して分かったことに伴う喜びは計り知れないものがある」。

「知的学習には、方法上の厳しさの果てには、苦闘して学びとった後の喜びがある。学校における教授は何にも増してこの貴重な体験を提供するのでなければならない。

座して棚からボタモチが落ちてくるのが、自学自習ではない。学習に内在的に伴う喜びを苦闘の中で経験した子どもは、学校を出て独り立ちした後でも、自ら学び自ら習うことが、とりもなおさず、自己の内的成長に資することを知り、あら

ゆる機会、あらゆる手段を用いて自己を教育する。

学校の教師は、自学自習の能力を子どもに教育するために、ただ教えこむ以上に、はるかに多くの仕事をし、これまで以上に教授能力を高めなけれなばならない」。

佐藤は、たとえ厳しく、また努力を伴うものであるにせよ、子どもの中に「勉強という骨おりがユカイでたまらないような心性をきずきあげることが大切」（波多野完治）であると主張し、これを「勉強の復権」と呼んでいる[15]。

ところで全３章中、１と２の前半の行論は、以上の通りであるが、２の後半と３の力点は、勉強それ自体から逸れて、「今」の「学校教育の状況と課題」[16]、殊に「教科学習（特に知的教科）」にかかわる「授業の改造」、別言すれば、「教科における知的教育の復興」の問題に移ってしまっている[17]。それでも最後は、次のように締め括られている[18]。

勉強は、学校における勉強だけではない。むしろ、学校では教室というが、家では勉強部屋というように、自己教育、もっと正確にいえば、自己教授self-instructionこそ本命であろう。

学校における勉強は、家庭における勉強、さらには学校卒業後における勉強の基礎をつくるのであって、今こそこの話題を明確にすることが教育学的に問われている。

このような勉強に関する佐藤の考え方の成立は、管見の限り、1969年まで遡及することが可能である[19]。しかし1975年９月以降の動向は、どうにも追跡することができない。

Ⅳ　今後の課題

筆者の手元にある城北高等学校（東京都板橋区に所在する私立男子、中高一貫、進学校の高等部）の卒業生が書いた大学「合格体験記」には、「現役生へのメッセージ」として、例えば次のような熱い言葉が並んでいる。

「勉強は、量より質と言うけれど、質を求める前に量を確保せよ」。「勉強に必要なこと、それは復習すること、メモを

取る力」。「勉強の不安は、勉強でしか解消することはできない」。「自分の成績は自分で上げろ。不安な気持ちというのは、行動していないときに湧き上がるものなのだ。だからあなたがやるべきことは悩むことではない、勉強することだ」[20]。

かつて大勢であった偏差値による価値一元的で序列的な入試の秩序を安易に肯定するつもりは全くないし[21]、その弊害は克服されなければならないが、「一発勝負」の学力試験に向けた懸命な頑張り、すなわち受験勉強が、当事者にとって貴重な経験、大切な思い出となり、成長どころか、飛躍の契機となるケースがよくあることは間違いない[22]。（必ずしも結果の成否は問わないとはいえ）首尾よく蛍雪の功なって見事志望校合格となれば、それはなおさらのことだ。子どもの勉強離れが叫ばれて久しい中、たとえ外在的な目的のため、或いは外発的に動機づけられたものであれ、日々机に向かう行為自体が、どれほど尊いものであるか。にもかかわらず、勉強のあり方については、主題的に追究されるどころか、むしろ疎外されてきた。そして2000年頃以降の我が国においては、「勉強と学びは別物である」、「勉強から学びへの転換を図らなければならない」といった指摘が相次いでいる。

「読者のなかには、『学び』も『勉強』も同じことだと思う人がいるかもしれないが、実は大きく異なっている。『学ぶ』の旧字体は『學』であり、字源的にみると、ある空間のなかで子どもたちが相互に交わりながら、大人の手を借りて成長していくという意味がある。それに対して、『勉強』のほうは、『勉』にも『強』にも『しいる』『無理やりさせる』という意味がある。ある目的のためには苦しくても我慢して励むということになる」[23]。

「どんなに『学力低下』論が叫ばれようとも、また教育行政がどんなに『基礎学力の徹底』を推進しようとも、子どもたちは、もはや『東アジア型の教育』の復古主義的な＜勉強＞の世界に回帰することはないでしょう。＜勉強＞の時代はもう終わったのです。いくら＜勉強＞に打ち込んでも、もはや、その行く手に希望もなければ幸福もないことを、子どもたちは、時代に対する感受性によって知っています。そし

て子どもたちは＜勉強＞の世界から離別し、＜学び＞の世界を求めてさまよっています」[24]。

しかし、だからといって、勉強という概念を時代錯誤とみなし、捨て去るのは早計に過ぎる。篠原と佐藤の勉強論にしても、そこには、今もなお無修正のまま通用する部分、或いは学び論として解釈し直すことができる余地があるのではないか。次稿において、両者の理論の普遍性と可能性を慎重に見極めたい。

注

（1）助川晃洋・王頔・陸希・烏達巴拉「教育学系大学院留学生における修士論文作成デザインの端緒－構想の進展とテーマの発見－」『国士舘人文科学論集』創刊号、国士舘大学大学院人文科学研究科、2020年２月、pp.130-131.

（2）　修士論文（2021年１月提出）の題目は、最終的に、著者自身の判断で、「中学生の勉強のあり方の変遷に関する一考察」に変更されている。

（3）小笠原道雄・田中毎実・森田尚人・矢野智司『日本教育学の系譜　吉田熊次・篠原助市・長田新・森昭』勁草書房、2014年

（4）梅根悟「解説　篠原助市とその教育学」篠原助市著、梅根悟編『批判的教育学の問題』明治図書出版、1970年、p.219.

（5）J.S.ブルーナー著、鈴木祥蔵・佐藤三郎訳『教育の過程』岩波書店、1963年
J.S.ブルーナー著、佐藤三郎編訳『教育革命』明治図書出版、1967年
J.S.ブルーナー著、佐藤三郎訳編『人間の教育　講演・論文と解説』誠信書房、1974年
佐藤三郎編著『ブルーナー入門』明治図書出版、1968年
佐藤三郎編『ブルーナー理論と授業改造』明治図書出版、1972年
佐藤三郎『学び方学習新論　ブルーナー理論の再考察』明

治図書出版、1976年
佐藤三郎『ブルーナー「教育の過程」を読み直す』明治図書出版、1986年
（6）「佐藤三郎教授略歴・著書・論文目録」『人文研究』第36巻第1分冊、大阪市立大学文学部、1984年12月、pp.1-23.
（7）　篠原の「実際的教育学」構想において、『教授原論』の対を成す著作である『訓練原論』では、前者に見られたようなナショナリズム的思想が、すっかり洗い落とされている。
篠原助市『訓練原論』宝文館、1950年
（8）篠原助市『教授原論－特に国民学校の授業－』岩波書店、1942年、p.433.
（9）同上、pp.433-434.
（10）同上、pp.434-436.
（11）同上、p.435.
（12）篠原助市『教授原論　学習補導の原理と方法』玉川学園大学出版部、1953年、pp.411-414.
（13）佐藤三郎「勉強の教育学－勉強の人間形成的意義－」『児童心理』第29巻第9号（通巻346号）、金子書房、1975年9月、pp.22-23.
（14）W.オコン著、細谷俊夫・大橋精夫訳『教授過程』明治図書出版、1959年
エリ・ヴェ・ザンコフ著、矢川徳光訳『授業の分析（上・下）』明治図書出版、1960年
H.クライン著、吉本均訳『教授の原則』明治図書出版、1964年
（15）（13）と同じ、pp.24-25.
（16）同上、p.25.
（17）同上、pp.27-28.
（18）同上、p.29.
（19）佐藤三郎「『学習のしかたの学習』の再認識」『児童心

理』第23巻第１号（通巻266号）、金子書房、1969年１月、pp.62-67.
佐藤三郎「教育における自学自習」『現代教育科学』第12巻第８号（第142号）、明治図書出版、1969年８月、pp.52-90.

（20）私立城北高等学校進学指導部編『2020年度進学情報資料』2020年６月、p.140.及びp.2.

（21）乾彰夫『日本の教育と企業社会　一元的能力主義と現代の教育＝社会構造』大月書店、1990年

（22）和田秀樹『受験勉強は子どもを救う　最新の医学が解き明かす「勉強」の効用』河出書房新社、1996年
和田秀樹『「反貧困」の勉強法　受験勉強は人生の基礎学力』講談社、2009年
和田秀樹『受験学力』集英社、2017年

（23）田中耕治・鶴田清司・橋本美保・藤村宣之『新しい時代の教育方法（改訂版）』有斐閣、2019年、p.179.

（24）佐藤学『学力を問い直す－学びのカリキュラムへ－』岩波書店、2001年、p.58.

参考文献

天野郁夫『教育と選抜の社会史』筑摩書房、2006年

市川伸一『勉強法の科学　心理学から学習を探る』岩波書店、2013年

伊東達也『苦学と立身と図書館　パブリック・ライブラリーと近代日本』青弓社、2020年

江森一郎『「勉強」時代の幕あけ　子どもと教員の近世史』平凡社、1990年

苅谷剛彦『階層化日本と教育危機－不平等再生産から意欲格差社会（インセンティブ・ディバイド）へ』有信堂高文社、2001年

久冨善之『競争の教育　なぜ受験競争はかくも激化するのか』労働旬報社、1993年

佐伯胖『「学び」の構造』東洋館出版社、1985年
坂本浩一「近代漢語の一考察－洋学資料に於ける『勉強』の用例から－」『文芸と思想』第60号、福岡女子大学文学部、1996年２月、pp.139-151.
櫻井茂男『自ら学ぶ意欲の心理学　キャリア発達の視点を加えて』有斐閣、2009年
佐藤学『「学び」から逃走する子どもたち』岩波書店、2000年
佐藤勇治編『学習塾百年の歴史　塾団体五十年史』全日本学習塾連絡会議、2012年
澤柳政太郎『学修法』同文館、1908年
竹内洋『立志・苦学・出世　受験生の社会史』講談社、2015年
太宰治『正義と微笑』旺文社、1976年
千葉雅也『勉強の哲学　来たるべきバカのために（増補版）』文藝春秋、2020年
苫野一徳『勉強するのは何のため？　僕らの「答え」のつくり方』日本評論社、2013年
西林克彦『あなたの勉強法はどこがいけないのか？』筑摩書房、2009年
西村多久磨・櫻井茂男「中学生における自律的学習動機づけと学業適応との関連」『心理学研究』第84巻第４号、日本心理学会、2013年10月、pp.365-375.
庭野義英・平川研・山岸潤子・菅原隆宏・多田篤司・渡辺亮夫「『勉強』の概念の変化－理科嫌い・理科離れの背景－」『上越教育大学研究紀要』第17巻第２号、上越教育大学、1998年３月、pp.879-890.
野口悠紀雄『「超」勉強法』講談社、1995年
葉一『塾へ行かなくても成績が超アップ！自宅学習の強化書』フォレスト出版、2020年
深谷昌志・深谷和子『遊びと勉強　子どもはどう変ったか』中央公論社、1976年
福沢諭吉『学問のすゝめ（改版）』岩波書店、1978年
Benesse教育研究開発センター企画・制作『神奈川県の公立中学

校の生徒と保護者に関する調査報告書』ベネッセコーポレーション、2011年1月
吉田武『虚数の情緒　中学生からの全方位独学法』東海大学出版会、2000年